

あれは何曜日だったのだろうか。ほかに誰もいなかった。一九四七年六月のある日の午後のことである。

その二、三日前、学校（中央大学夜間部）の教室で隣りあわせた高橋昭君が「君、何か仕事しているの」「いや、何もしていない、探しているんだ」「じゃ、僕のところに来てみたら」と、親切にも外務省文書課の英文タイプ室に連れて行ってくれた。そこで始めて係長の松原さんにお目にかかったのであった。

「これを打つてみて下さい」と原稿を渡されて、タイプの前にはすわったが、全然打てない。それもそのはずで、市中のタイピスト学校で三ヶ月かそこら集中的に習っただけで、その後ずっと機械を見たことさえなかったのだから。逃げ出したい気持ちであったが、恥ずかしさをこらえて、ほとんど何も打てない紙を差し出した。ところが、松原さんはなんと思われたのか、いとも簡単に「いいでしょう」と言っただけで、肩の力が抜けたように感じた。

戦争が終って、志願兵で入った海軍から復員してきてから、ただただ食うために、進駐軍の労働者やペンキ工などあれこれやっていた私にとって、これは初めての定職であった。しかも豊南坂の寮に入ることもできるようになって、職住二つながら手にしたあの時のうれしさは、いまでも忘れられない。

それにしても、あの日ことを思い出す度に、松原さんがなぜタイプの全然打てない人間をタイピストに採用して下さったのか、不思議でならない。その理由を何度かお聞きしてみようと思いつながら、さすがの私もいかに

にも恥ずかしくて、ついにお聞きしたことはなかった。多分「ウ、ハハ」と笑われるだけであつたらう。

何にせよ、あの時の「いいでしょう」という松原さんの一言が、それからの私の人生を開く転機となつたのであつた。

○

仕事を始めてみれば、タイプは何とかなつていったのであろう。仕事の上で困つたり、課長のお小言をいいたいたという記憶はない。

そもそも松原さんはいつも穏やかで、決して人を叱ったりはなさらなかった。しかしこれは、その比率が五対一か六対一でもあつたらう女性優位の職場で、われわれ悪童どもが叱られることをしなかつたということではない。松原さんは大いに見て見ぬふり、われわれはそれをいいことに、しばしば「悪事を働いた」のであつた。その関係は上司と下僚というより、やさしい「先生」と、わるがき「生徒」のそれであつたと言つてよい。

「生徒」に対する「先生」の唯一のお小言は、「勉強しなさい」であつた。松原さんは私どもに省内の語学講習会に出席するよう勧めて下さるなど。いろいろと私どもが勉強するように仕向けて下さつた。そういうわけで、英文タイプ室は仕事場というより、まるで学校の教室のようであつた。のちに私どもが、これを「松原学級」と呼ぶようになったのもむべなるかなである。

月給だけではとても足りない私に、松原さんは参議院事務局の夜勤のアルバイトなども紹介して下さつた。（そこに岩崎健彌氏がおられた。）それでも学校の月謝が続かず、結局私は夜間の大学を一年で退学してしま

った。外務省時代は、その他にも学校らしい学校に行かなかった私にとって唯一の学生時代であり、「松原学級」は私にとって「同窓生」のある唯一のクラスとなったのである。

お昼休みには、松原さんの大きな机のまわりにすわって、フランス語をおしえていただいた。フランスでは、行き倒れの人があると神父さんがとんできて、その額に唾をぬるんだ（終油）というような、松原先生の余談ばかりが妙に頭に残っている。モーパッサンの何か短編を読んだのまで覚えているが、この不肖の弟子はその後さっぱり勉強せず、いまではすっかり忘れてしまった。申し訳なく、残念なことだと思っている。

○

おおらかな上司と、親切な同僚達に囲まれて（新米タイピストを皆さんよく指導して下さい）、そんなにも居心地よく、そんなにも楽しく働き、まずまず生活もできていたのに、若さは私に別の道をとらえさせたのであった。外務省にいる間に聖書に出会った私は、キリスト教の仕事をしようと決心し、一九四九年三月退職してしまつたのである。その時も松原さんは私の生活を心配して、やめたあとタイブのアルバイトが出来るようにといういろいろ配慮して下さいだったのであった。

やめて何か月か経つたころ、友人のみなさんになぜそのような道を選んだかを話しに、英文タイブ室に伺つたことがある。その機会も松原さんが用意して下さい、ご自分も私の話に耳を傾けて下さつた。若僧の未熟な話をよく聞いて質問までして下さいのだが、いま思い出しても冷汗三斗の思いがする。

それからは外務省への足も次第に遠くなり、何回か旧い友人方を訪ねて部屋にお寄りすることはあつたが、

松原さんともすっかり疎遠になつてしまつた。

いちど思いがけなく、三田の慶應義塾大学のキャンパスでお目にかつたことがあつた。一九七〇年か七一年の八月である。そのころ私は慶応の通信教育で勉強しており、夏期スクーリング出席のため毎日三田に通つていた。松原さんはすでに外務省を退かれ、白百合女子大学で教えておられるということであつた。夏の日の木陰の話は主に勉強のことで、「ギリシャ語はどうですか」と励まして下さつた。慶応出だと同う松原さんに、慶応の学生として、慶応のキャンパスでお会いしたということは、単なる偶然以上のこととして楽しい思い出となっている。

松原さんは、外務省におられて領事なども勤められたというが、とてもお役人のようには見えなかつた。学級肌のフランス語の達人で、晩年には大学で教えられもしたが、と言つていわゆるプロフェサーというタイプとも違うように思う。ではと言われると困るが、何よりも、およそ組織などというものにはなじまない自由人であられたのではないだろうか。造詣の深かつたフランス語を通してごく自然に身につけられたフランス流の個人主義を背骨に、はにかむような微笑みを浮かべて、少しゆするように右肩をあげて歩かれる姿には、茫洋とした東洋の大人の風格も感じられたのであつた。

私は「松原学級」の中途退学者であり、フランス語も落第生であるが、とにも角にも勉強をつづけ、いまも二、三の学校で英語を教えたり、小さなキリスト教の講座でギリシャ語を教えたりしている。その基礎はすべて「松原学級」にあつたのである。

私のように複雑な人間は、松原さんの洗練さからはおよそ遠いところに生きていた。そのような私を、どんな

ときにも、「いいでしょう」と言つて、人間的に受容れて下さった松原さんのご厚意と寛容を、人生の最終ラウンドに立っていたいま、それがどんなに有難いことであつたのかと、しみじみと感謝にたえない思ひでいる

(一九八七年九月三十日 記)